

システムティックなグラフィックス2題

著者	水野 信太郎
雑誌名	北翔大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	9
ページ	223-228
発行年	2009
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000542/

システマティックなグラフィックス2題

The Two Works of Systematic Graphics Arts

水 野 信 太 郎

Shintaro MIZUNO



作品—1 炭酸飲料水の中の気泡 「上へ上へ」

270mm×380mm



作品—2 「とび出すもの」と「遠ざかるもの」

270mm×380mm

本稿「作品部門」において披露する小品2作品は、いずれも大学における美術教育あるいは一連のデザイン活動という実践の中から生み出された創作物の一部である。これらは筆者自身が半ば学生諸君と競うようにして、授業時間の範囲内で制作を試みたものであり、時としては課題説明用の作例として当該科目の履修者全員に示す「教材」の役割も果たすこととなる作品たちであった。

今日コンピューター・グラフィックスを支える技術が余りにも発達し、金銭的なコスト面でも普及しやすい条件が整っている。その結果、機械的なグラフィックス作品が、わたくしたち現代人の身近で日常化している。そのような状況下だからこそ、弊作品などは十分に歴史的な意味をもつ資料となり得よう。

ヒトという生き物は、身体の一部である両の「手」を自ら駆使して、さまざまな造形物をつくり上げてきた。この過程を通して、有形無形の多くの副産物をも獲得してきた。とりわけ学校教育の場にあっては、そのような体験は今なお意義深いものであると言える。そして、この視点は『手考足思』の歴史観へと結びついていく。

本稿の小作品は、「溝引き」と呼ばれる伝統的な手法のみで仕上げられている。面相筆（めんそうふで）あるいは簞筆（かぶらふで）など日本の伝統的な毛筆を用いて、水彩絵の具による彩色仕上げを施してある。毛筆を使って紙面に直線を描くことが可能な「溝引き」と称する特殊な手法は、溝引き用の定規と「スライダー」と称される1本の細い棒を1組にしてなされる。溝引き用定規は通常30cm程度のものさしが、この機能を兼ねていることが少なくない。一般的な30cmものさしであっても、目盛が刻まれていない側に、浅い溝が真っ直ぐに掘り込まれている品が、溝引きに使用可能な定規である。

「溝引き」の具体的な方法は、墨汁または絵の具を含ませた1本の筆と、1本のスライダーを箸のように利き手で持つ。スライダーが下すなわち親指の付け根側、そして毛筆が上方になるように構える。これら2本の道具が形づくる穂先の間隔・開きの寸法を一定に保つ。そのためには、「一膳の箸」が一定寸法で開いた状態を保つように、手の握り加減を固定するのがコツである。その状態でスライダーを定規の溝に合わせて滑らせる際、上方に位置する筆の穂先を、紙面に触れさせながら細い直線を描くのである。

なお通常「スライダー」はガラス製であることが多い。しかし定規の溝に沿って円滑にスライドすることが支障のない品でさえあれば、必ずしも「スライダー」を新たに購入するには及ばない。「溝」に納まる細さ、あるいは先端の丸さを有する箸などのスティックか筆記用具で十分に機能を果たすことが出来る。

「溝引き」の手法は、戦国時代から近世期にかけての鉄砲鍛冶が、火縄銃の設計図を和紙に毛筆で清書・製図する際に、不可欠となる技術であった。当時の定規は竹のものさしか、木製の定規であったろう。スライダーに相当する品は、竹などで作られた細い軸でよい。筆者は、

江戸時代から近代にかけての名古屋で、第六代まで主として神社を得意とする堂宮大工棟梁を襲名した鈴木幸右衛門（すずき・こうえもん）家において、「溝引き用」真鍮製の篋（へら）を目にしている。その説明をして下さった方は、七代目にあたる建築家・鈴木雅太郎（すずき・まさたろう）氏であった。

なお筆者が「溝引き」という手法を、学校における授業の中で正式に教育されたのは、建築学の一部としての「造形」の時間であった。その科目には、通常よりもかなり厚さの薄い書籍が、テキストとして採用されていた。同書の監修者は、改組前の横浜国立大学工学部建築学科の教授であった河合正一工学博士、さらに協力者の一人には後年に日本大学生産工学部建築工学科教授となる山口廣先生が名を連ねておられた。両先生とも建築意匠・建築歴史学の泰斗として高名な専門家である。

再び本稿の 2 作品に戻って言及すれば、上記において述べてきたように作品は、すべて直線によって構成されている。「溝引き」の手法だけを身につけることを、教育上の目的とした課題だからである。したがって規（ぶんまわし）すなわちコンパスは全く用いていない。加えてそのほか雲形定規、鉄道定規、またフリー・ハンドを問わず一切、曲線部分を含んでいない。本作品たちは、多角形のみが組み合わせられて完成された造形である。手仕事による伝統的な作例ではあるが、あえて「システマティック」と称した直線だけの集合からなる作品である。